



令和八年年頭のごあいさつ

塾頭 高橋 光雄

明けましておめでとうございます。

塾生、塾友はじめ皆さまにおかれましては、清々しいお気持ちで令和八年の年明けをお迎えになられたことと存じます。

昨年は、人見理事長が体調不良ということで三月に開かれた評議員会・理事会において退任され、小野利廣理事が三代目の理事長に選任されました。小野理事長のもと、今年も塾頭としての職責を全うする所存であります。何卒よろしくお願い申し上げます。

人見前理事長は、故渡辺薫理事長の後任として塾経営にご尽力くださると共に、塾事務所に常駐し、塾生・塾友やお客様の応接等、塾の存在感を大いに高めてくださいました。体調も安定していることから、月一度の運営委員会には出席をいただき、引き続き随時随想の執筆もお願いしているところです。

小野理事長は就任のあいさつで、「公益法人改革がスタートしています。来年が評議員の改選期になりますので、一年間で新たな体制の準備と公益法人改革に適合する制度の整備を進めていく所存です。立教志塾は創立から三十五年を経過しました。私たち創立時からのメンバーは、創立に当たった方々の当時の年齢を越えようとしています。老朽化せずに今一度創立の原点、初心『まちづくりは人づくり、人づくりは我づくり』を思い起こし、新たな一歩を踏み出していかなければと考えます」と、述べられています。

昨年はNHK大河ドラマ「べらぼう」に、白河市民が誇りとする松平定信公が準主役として登場し、白河市の知名度が全国に広がりました。われらの定信公が結城宗広・親光公親子の活躍を讃えて揮毫した感忠銘全文（二〇七文字の終わりは『莫民自棄、国能生賢』という八文字で結ばれています。「民自ら棄つることなくんば、国能く賢を生ぜん」と読みます。これは、白河地方の人々が自分の思うようにならないからといってやけになり、自分自身を見捨てるようなことがなければ、（優れた偉人を生んだ）この地方から、将来必ず立派な人物が生まれるに違いない、という予言です。このことばこそ、わがふるさと白河の誇りにすべき心です）（深谷健著「親と子で読む松平定信伝」志塾叢書第三号）。この「白河の誇りにすべき心」「ふるさと魂」を呼び起こすことを、今年の塾活動の基底に据えたいと思います。

さて、国際情勢はといいますと、中国政府の目に余る帝国主義的政策や常任理事国でしかも核大国のロシアによるウクライナ侵略が、国連体制を事実上崩壊させています。国内に目を転じると、地方都市・農村の衰退は少子高齢化の影響も勿論ありますが、軽軍備・経済重視の国策で豊かさを求めてきた代償ともいえます。バブル経済が弾けてからは「失われた三〇年」といわれるように、平和裏にデフレスパイラルから脱却することの難しさを味わってきました。この外圧と変化に対し、私たちはしっかりと現実を見つめ、熱狂に促されることもなく、先人の知恵に学び、柔軟な意識で対応していく必要があると思います。麗しく愛しい郷土を荒廃から守るために、自分のできることで、そして自分のありようをお互いに切磋琢磨していく一年にしたいと願っています。